

特集 近年問題となっている病害虫の防除対策

今回、暖冬等の影響で水稲被害が拡大しているスクミリンゴガイや新奇害虫として問題となるビワキジラミ、昨年被害が顕著であったタマネギえそ条斑病のアイリス黄斑ウイルスを媒介するネギ

アザミウマ、各々の防除対策の最新の知見を紹介する。

望月 証 (病害虫部)

(問い合わせ先 電話：0790-47-2447)

冬季耕うんでスクミリンゴガイ防除 そのポイントとは？

収穫後にできるスクミリンゴガイの防除手段に水田の冬季耕うんがある。ポイントは2つ。

①「土を細かく砕く要領で」、②「冬が来る前に」耕うんすること。

内容

暖冬により、水田内のスクミリンゴガイ（通称ジャンボタニシ：以下、貝）の越冬量とその被害（移植直後のイネの食害）が増えている。水田内の貝は、秋以降に土中5cm程度の深さに潜り、そのまま越冬する。水稲収穫後に一般的な耕うん作業で貝を効果的に防除できるので、そのポイントを紹介する。

ポイント① 方法：「土を細かく砕く要領で」

トラクターのロータリにより、土塊と一緒に貝を壊す(写真左)。具体的には、表土に亀裂が入るくらい乾かした後、トラクターの走行速度は通常の半分以下に、ロータリの回転速度は1～2段階上げて耕うんする。耕作深は通常の15cmで貝の越冬場所まで届く。走行速度1km/h、ロータリ回転速度2段(約750rpm)の条件で、通常の耕うんに比べて2.5倍の貝を破砕できた事例がある(図)。

ポイント② 時期：「冬が来る前に」

耕うんで貝が破砕できななかった場合でも、貝は寒さに弱いので、耕うん時期を早めることで、低温による殺貝効果も期待できる。耕うんにより地表に出された貝は、寒風にさらされて死滅する(写真右)。本格的な冬が来る前に耕うん作業を行うことが望ましい。

今後の方針

今回紹介した冬季耕うんは、移植前に水田内の貝を減らせることから、浅水管理等の移植直後の対策に併せて勧めたい。

柳澤 由加里 (病害虫部)

(問い合わせ先 電話：0790-47-1222)

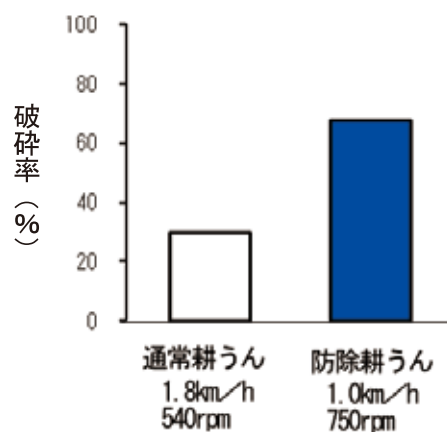


図 耕うん条件の違いによるスクミリンゴガイの破砕率の比較



写真 スクミリンゴガイ 冬季耕うんにより壊れた貝(左)と地表面上された貝(右)